

グアム日本人学校（中学部）における国際理解教育

前グアム日本人学校 教諭

北海道千歳市立青葉中学校 教諭 佐々木 康 人

キーワード：国際理解、異文化理解、英語学習

1. はじめに

グアム島は、アメリカ合衆国の準州であり、連邦政府とは異なる独立した政治形態を持っている。日本から南東に約2500kmに位置している。日本からは飛行機で3時間半の距離であり、総面積は594km²で、兵庫県の淡路島とほぼ同じ面積であり、人口約16万人が暮らしている。狭い島ではあるが実は多様な人種の人々が生活していて、そのおおよその内訳はチャモロ人（40%）、フィリピン人（24%）、アメリカ人（15%）、その他（21%）となっている。

グアム日本人学校に通う子どもたち（幼稚部、小・中学部）は、ハーフやクォーターの子どもの割合が高く、中には両親ともに日本国籍を持っていない児童生徒も在籍する。グアム日本人学校は日本の教育関係法令及び学習指導要領に準拠し、日本国内における義務教育と同等の「日本人としての教育を行う」ことを基本としている。

グローバル化がより一層進むと思われるこれからの時代を生きていく日本の子どもたちには、国籍・人種を越えた多様な価値観の中で共に生きていく力を育むことが求められている。グアム日本人学校では、その立地の利点を生かし、現地ならではの国際理解教育としての充実した現地語学習（英語学習）や現地校との交流学习を積極的に取り入れている。

2. グアム日本人学校の国際理解教育について

(1) 英語教育について

グアム日本人学校では、国際理解教育の一環として、週3回のネイティブスピーカーによる英語の授業と、年1回行われる現地校との交流学习を設定している。

①英語の授業（毎週）

○英語活動の位置づけ

グアム日本人学校中学部では、「裁量の時間（週1）」と「総合的な時間（週2）」として実施している。

○目的

- ・ネイティブの講師による英語を使用した英語授業により「読む」「書く」「聞く」「話す」の4領域にまたがる総合的な英語運用の力を育成する。
- ・アメリカやグアムの文化をテーマに調べたことや自分の考えを英語でまとめて発表する英語でのプレゼンテーション能力の育成、自国文化や異文化に対する関心や理解を深める。

○指導にあたって

- ・経験豊富なネイティブの講師を採用し、英語で授業を行う。
- ・自国文化・異文化理解の授業では、調べ学習と英語でプレゼンテーションを行わせ、発表ごとに英語講師が「授業全体への取り組み」「書く力」「話すスピード」「声の大きさ」「顔の向き（姿勢）」を観点にして、ABCとコメントで評価する。
- ・総合的な学習の時間であることを考慮し、年3回（6月、12月、2月）プレゼンテーションデーを実施する（プレゼンテーションのテーマ例 「権利の熱気球」「世界とグアム」など）。

②交流学習

○目的

- ・交流活動を通して、初めての友達にも積極的にかかわりながら、ともに活動することを楽しもうとする態度を育てる。
- ・アメリカやグアムの文化に興味や関心をもつとともに、日本の文化について理解を深め、それを友達に紹介する機会にする。
- ・英語の時間等で学習したことを活かし、自分のことを表現したり、相手とかかわったりして、コミュニケーション能力の育成を図る。

(2) 共生・人権教育について

グアム日本人学校では、基本的人権を尊重する教育を実践し、みんなで共に生きる民主的な社会を築く人間をめざすことを目標に、人権教育の計画を策定している。

各教科、各領域の中にこれを位置づけて具体的な取り組みを行うと共に、年に1度設定している人権週間では各学年の取り組みを交流したり、人権をテーマに作文を書くことも行っている。

こうした取り組みがグアムの地に生活しているという特質をふまえた人権教育の充実につなげられるよう毎年見直しを進めているところである。

4. 授業実践

—2013年度（平成25年度）Harvest Christian Academyとの交流学習での取り組みについて—

(1) 現地校との交流学習の充実を求めて

グアム日本人学校中学部の現地校との交流学習では、その目的をふまえながら英語担当教諭を中心に交流先の担当者の意向を伺いながら進めてきた。交流先のHarvest Christian Academyでは、日本の高校生に相当する学年で日本語クラスがあり、主にその所属生徒と日本人学校の生徒の交流の場ととらえている。交流学習の柱は日本人学校の生徒が自分たちで調べた日本の文化について英語で発表し、現地校の生徒はそれを受けて感想や質問などを英語や日本語でやりとりするというものである。また、現地校の生徒による学校案内や授業の説明、昼食時の会話なども重要なコミュニケーションの機会として位置付けている。

2012年（平成24年）度のSt. John's Schoolでの交流学習では、日本の昔の遊びや今の遊びについて紹介したり、アニメや漫画の紹介、日本の歌の紹介をプレゼンテーション形式で行った。事前に作成した原稿をもとに堂々に行うことができ、St. John's Schoolの生徒たちも興味を持って聞き入っていた。また、日本語クラスを参観した生徒が、St. John's Schoolの先生の代わりになってカタカナを教える場面もあり、充実した交流学習となった。交流学習後の反省では、さらなる充実を求めて、現地校の生徒たちとグアム日本人学校の生徒たちが、授業や体験学習などに一緒に取り組む場面が取り入れられると良いという意見があがった。英語・外国語の学習を通してコミュニケーション能力を向上させ、グアムに生活している特徴を生かして異文化を理解し、共に生きようとする態度を身につける実践を具体化させるために、交流学習を有効に活用していくこととした。

2013年度（平成25年度）のHarvest Christian Academyでの交流学習では、これまでの流れを基本としながら、新たな取り組みとして交流先の生徒たちとのグループワークに取り組む場面を設定した。

(2) 「レヌカの学び—自分の中の異文化に会う—」の実践

①教材について

「レヌカの学び」とは多文化共生と人間尊重を考えるカードゲームである。この教材は開発教育協会DEAR (Development Education Association & Resource Center) のサイトからダウンロードできる。ネパールのレヌカさんが、実際にネパールで暮らしていた時と日本に滞在していた時の行動や考え方の変化をもとに教材化した異文化理解教材である。「国」というよりも「個人」の多様性を理解することができ、他の文化のバージョンにも応

用しやすいのが特徴である。カードを使って、どちらがネパールで、どちらが日本でのことなのかグループで話し合っていく。

レヌカさんの体験を通して、異文化に出会うと同時に自文化あるいは自分の内面を見つめ直すことにつながり、さらにグループでのディスカッションを通して相手の意見に耳を傾け、尊重する態度を形成することをねらいとしている。

具体的なねらいは以下の3点。

- ・ 知らず知らずのうちに、自分の中にできている「思い込み」「偏見」に気づく。
- ・ 「レヌカの学び」は「自分の学び」であるということに気づき、異文化理解のカギは自分自身の中にあることを実感する。
- ・ ネパールという「国」ではなく、レヌカさんという「個」の視点に寄り添っていく「学び」のあり方を追求しながら、多文化共生のために私たち一人ひとりにできることを考える。



■原作：土橋泰子
 ■発行：開発教育協会
 ■初版発行協力：あおもり開発教育研究会／開発教育を考える会
 ■初版2004年8月2日、第2刷2007年1月30日、新版第1刷2011年4月1日
 ■価格：無料
 ■対象：小学生3年生以上

〈教材の具体的な内容〉

「ネパールにいるときのレヌカ」のカード、「日本にいるときのレヌカ」のカード、それぞれ9枚ずつある。それぞれには「私の夢は主婦になることなの」や「子どもたちはよく遅刻をしてくるわ」といった文章があり、グループでディスカッションしながらネパールにいたときの話が日本にいたときの話が分けていく。裏面には絵が描かれており、すべて正解しているとそれらの絵があうようになっている。

そのグループディスカッションを通して、多様な意見に揺さぶられたり、自分の思い込みに気づかされたりしながら、自分を見つめなおしていくことにもなる。

②実践にあたって

この教材の対象は日本語で学ぶ学習者であるので、まずは英語で学ぶ学習者にも対応できるように手を加えた。学習者はHarvest Christian Academyの日本語クラスを選択している高校生10名とグアム日本人学校の生徒である。全体の進行を、グアム日本人学校の英語担当教師が英語を中心に行い、スクリーンでは英語による説明を表示した。英語が得意ではない日本人学校の生徒も数名いること、Harvest Christian Academyの生徒にとっては日本語の学習の場で



「日本にいるときのレヌカ」のカード
(日本の絵の裏面)

My dream is to be a singer and dancer. 私の夢は歌手・ダンサーになることよ。	Some students bring snack and drink to school. 学校におやつや飲み物を持ってきて食べたり飲んだりする子もいるわ。	I take the day off when I feel a little sick. 軽いカゼでも仕事は休みます。
Students at the school for the deaf wear a uniform every day. 聾学校の子どもたちは毎日、制服を着て学校に来るの。	I eat breakfast every day. 私は朝ごはんは必ず食べるわ。	I wash my hands before I eat. 私はご飯を食べる前に必ず手を洗うよ。
I closely check vegetables and fruits when shopping. 野菜や果物を買うときはよく選んで買うわ。	Children often come to school late. 子どもたちはよく遅刻をして来るわ。	Children of different ages study together at school. 学校では違う年齢の子どもがいっしょに勉強します。

「ネパールにいるときのレヌカ」のカード
(ネパールの絵の裏面)

My dream is to be a homemaker. 私の夢は主婦になることなの。	Food is given to everyone at school. 学校で食べ物を全員に配るよ。	I go to work even when I'm a little sick. 軽いカゼなら仕事に行くわ。
Some children at school wear a uniform and others don't. 聾学校の子どもたちは制服を着る子も着ない子もいるわ。	I sometimes don't eat breakfast. 私は朝ごはんを食べないこともあるよ。	Children play with their handmade toys. 子どもたちは手作りのおもちゃで遊んでいることもあるよ。
I go to bed late. 私は「遅寝」をするわ。	Children rarely come to school late. 子どもたちはめったに遅刻はしません。	Children of the same age study together at school. 学校では同年齢の子どもが集まって勉強するんです。

あるという意味も含めて、口頭では日本語による説明も加えた。

③実践を終えて

教材の持つ力により、どちらの学校の生徒も意欲的に取り組むことができた。この教材における具体的なねらいの1つである「自分の中にできている「思い込み」「偏見」に気づく」姿がすぐに見られた。しかし、そこからグループ内で話し合いを深め、教材の主人公であるレヌカさんの学びが自分の学びに結びつくところまでは到達しなかったように感じる。

Harvest Christian Academyの生徒たちは日本語クラスに所属しているが、こうした活動で話し合いができるレベルではない。当然のことではあるが、活動中でのちょっとした眩きなどは英語である。グアム日本人学校の生徒たちの中には、日常の英会話にそれほど不自由していない者がおよそ半数くらいいたが、この教材における話し合いの場面ではなかなか自分の考えを述べるができなかった。家庭での英会話や友人との会話とは違ったレベルでの英会話能力が求められることに戸惑いを感じていたように見受けられた（Harvest Christian Academyの生徒が高校生ということも影響していたと考えられる）。

グアム日本人学校の生徒にとって、普段の日常会話とは違う英会話の必然性を感じる良い機会になったのではないか。Harvest Christian Academyの生徒にとっては、教材自体が興味深い内容だったと思われ、活動時に記入してもらったワークシートからもそのことが伺えた（Harvest Christian Academyの先生にも好評であった）。

時間の関係からも、残念ながら本来教材が目ざしているところには到達することができなかった。しかし、普段の学校生活の中で英語と日本語という異なる言語で学んでいる2つの学習集団が、こうした優れた教材と一緒に取り組み、考えを伝えあおうとすることは今後の外国語の学習への動機づけになり、異文化理解の大切さを実感することになったのではないかと考える。教材が持っている力を存分に生かすことはできなかったが、こうした取り組みを積み重ねることで、生徒たち自身が外国語の学習の必要性を実感することや異文化に対する関心を高めることや理解を深めることにつながるのではないだろうか。

5. まとめ

グアムに派遣が決まった時に、自分の頭の中に浮かんだグアムのイメージはリゾート地としてのグアム、大航海時代に始まる大国に翻弄された歴史、先の大戦の傷跡などが中心であった。そのようなイメージもグアムの持つ一つの側面であることに間違いはなかった。しかし実際に生活することによって、この小さな島にさまざまな国や地域をルーツとする人々が今も暮らしていること、そのことによって独自の風土を育んでいることなどが少しずつ実感できた。

グアム日本人学校で学ぶ子どもたちにとって、グアムでの生活体験はこれからの時代を生きていく上で貴重な機会になると考える。派遣教員として在外教育施設とは日本の教育関係法令及び学習指導要領に準拠し、日本国内における義務教育と同等の「日本人としての教育を行う」ことを基本としているのだということを常に意識してきた。その上での英語の学習や現地理解学習、現地校との交流活動の充実に努めることも大きな使命の一つと考え3年間を過ごした。こうした取り組みの継続がグアム日本人学校の子どもの国際性を育むことの一助になることを願う。そしてこの経験を帰国後の日本国内の教育現場における自分自身の実践の中に生かしていきたい。

最後にこのような貴重な研修の機会を与えてくださったみなさまに感謝を申し上げる。